



喜劇王・渋谷天外⑥

地域史研究者
三善貞司

演劇哲学の対立も

天外最後の舞台上で「親バカ子バカ」を共演

昭和40年（1965）京都の南座で、「遙かなり道頓堀」に主演した「松竹新喜劇」座長渋谷天外は、舞台を下りた直後脳出血で倒れ、長い闘病生活に入ります。

代わって座の屋台骨を背負うのが天外の愛弟子藤山寛美ですが、彼は超一流の名人喜劇役者がありがちな、天下無数のワンマンでした。脚本の選定から出演者のきめかた、演出・装置・美術・照明にいたるまでご機嫌次第。たとえ館直志（天外の筆名）のホンでも気にいらぬと採用しないありさまです。

こうして天外と寛美の間には、うそ寒いすきま風が吹きはじめます。天外が倒れたから寛美が師匠をバカにしたのではありません。もっと本質的なものです。ふたりの演劇哲学の相違がさわだつてきたのです。極論すれば天外は文学者、寛美は天性の役者でした。

曾我廼家十郎・五郎の曾我廼家劇から、天外・寛美の松竹新喜劇まで、大阪の喜劇には三本の柱があります。

姦通はテーマにしない

かならずハッピーエンドで終わる

舞台上で殺人は行わない

のタブー（禁制）3ヶ条です。どんな悪党でも最後は真人間に戻るところで幕があり、観客は笑いながら涙ぐんで拍手する。大阪喜劇が教訓的な人情喜劇だといわれる理由は、ここにあります。

ところが天外の「花ざくら」は人妻の姦通、「銀のかんざし」は情痴の世界をとことん描いて救いがない。文芸的価値は高くても、天外にはシリラス（謹厳）なドラマとお笑いのドラマの区別がつかなかったのです。天外は、「ドラマを書け。客を笑わせようと計算したらあかんで。笑わせるのは役者の仕事やさかい……」

と、くどいほど脚本家たちに注文し、館直志も先頭に立って実践します。

ところが寛美はそうではない。ハナから笑わせるホンを要求します。さらに天外の演出はうるさいほど役者を縛り、身動き一つまで計算された演技を強制するが、寛美は即興的な笑いを大事にしました。その日の客席が何を期待しているのかをすばやく見抜いて、臨機応変に演じると命じるのです。

つまり天外と寛美の対立は、かつての松竹新喜劇の前身、松竹家庭劇での曾我廼家十吾と天外の仲違いの再現でした。十吾は仁輪加（江戸時代の色町で生まれたこっけいな寸劇。

大坂で流行)の継承者曾我廼家十郎の一番弟子です。

「そんな屁理屈おきなはれ。喜劇はお客さん笑わせたら、それでよろし」

と天外を鼻先であしらい、けんか別れた天才役者です。いつの間にか天外より23歳年下の寛美が、天外より15歳も年上だった十吾の芸を継いでいたのです。

やがて寛美は館直志のホンを勝手に解釈し、人生哲学を提起した大事な部分をあつさりとはし、どうでもいいところをここは面白いと熱演します。そのほうが観客にはるかに受けるのです。

それでも天外は見舞いにきた寛美に手を合わせ、「寛ちゃん頼む。新喜劇頼むで」と言い続けます。昭和42年(1967)2月、中座で行われた松竹新喜劇結成10年記念公演には、病院からぬけてかけつけ、顔をゆがめながら口上を述べています。

天外は入退院をくり返しながら、気分のいい日はちよこつと舞台に姿を見せます。最後の舞台になったのは昭和49年(1974)5月、京都南座での寛美主演「親バカ子バカ」でした。テレビで一世を風靡したあの当たり芸です。手が不自由なため手ぬぐいをつけて現れ、手ぬぐいを動かすことで手が動いて見える芸の工夫をしています。

天外は脚本や演出ではずばぬけていましたが、役者としての演技力は寛美より数段も劣ると言われます。たしかに大ざっぱな仕草に早口で喋りまくる聞きづらい台詞、せつかちな間のとりかた、相手構わぬ自分本位の動き…こう数えていくと、難点はいくつもありません。その天外が最後の舞台で初めてこまかい芸を工夫したのが、この手ぬぐいでした。

それからはベッドに横たわるだけの生活になりますが、なにしろ脚本・演出・主演から座長までこなし、人間ばなれしたハードスケジュールを生きた男です。この長い長い毎日、どんなに無念だったでしょう。今日はお昼から新喜劇のテレビがありますよと看護師に言われても、首を横にふっただけで返事もせず、見ようともしませんでした。天外を凌ぐほど超多忙になる寛ちゃんの足も、いつしか遠のいてしまします。

昭和58年(1983)3月、天外は心不全で息をひきとりました。享年76歳。倒れてから18年間も針のむしろの上に転がっていたことになりました。大変な読書家で教養・知性に富み、『笑うとくなはれ』『わが喜劇』等の著作があり、彼独特の芸術哲学が綴られています。その7年後の平成2年(1990)5月、寛美も61歳で世を去ります。

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞